

論文の内容の要旨

論文題目 中国語の動詞接尾辞“V 过”の意味と機能に関する研究—日本語との
対照も兼ねて—

氏 名 渡辺 昭太

本博士論文は、中国語の動詞接尾辞の一つであり、従来はアスペクト助詞と扱われてきた“V 过”に関して、その意味と機能について考察を行うものである。

まず序章においては、現代中国語における“V 过”の位置付けを述べると共に、他のアスペクト助詞との共通点及び相違点を確認し、先行研究における“V 过”の扱い方や先行研究の問題点などについて確認した。

第1章では、序章での確認を踏まえ、“V 过”の経験用法に関して考察を行った。まず、先行研究で経験用法とされている“V 过”の用例を精査すると共に、筆者が独自に採取した用例の分析を通じて、中国語における経験とはどのようなものであるかを考察した。その結果、中国語における経験とは、典型的には現在から比較的遠い過去の出来事であり、かつ、頻繁に起きうるような日常的なものではなく、それ自身に情報価値のある貴重な出来事であることが明らかになった。現在からの時間的隔たりに関しては、個々人の語感によっても揺れがある可能性があるが、発生からおおむね数ヶ月以上前の出来事が経験として解釈されやすいことを確認した。また、出来事の情報価値に関しては、特別な文脈がなくともそれが認識できる場合もあるが、前後の文脈や何らかの条件を付けることで情報価値が認識できる場合があることも併せて指摘した。さらに、刘月华 1988 において、“V 过”の使用環境として、関連文が存在することが指摘されている点に着目しつつ、“V 过”が人や事物に対する属性付与の機能を持つことを明らかにした。加えて、“V 过”は属性付与の機能を持つからこそ、

因果関係複文や逆接表現、導入表現といった言語環境で使用されることも併せて指摘した。

第2章では、「何らかの動作行為を済ませる」という意味で使用される場合の“V 过”に関して考察を行った。まず、先行研究の指摘を精査した上で、筆者が独自に採取した例文の分析を通じて、“V 过”が表す「済ませる」という意味の内実を考察した。その結果、“V 过”の表す「済ませる」という意味は、「行う必要がある行為を済ませる」あるいは「行われることが想定されることが済む」というもの、即ち「必然的に発生が予測できる予定性のある事態の遂行」というものであることを明らかにし、これを“V 过”の「予定遂行用法」と名付けた。また、予定遂行用法の“V 过”は、対象となる出来事が現在から比較的近い時間帯に起きるのが一般的で、この点は出来事の予測可能性という点とも意味的に合致することを指摘した。さらに、予定遂行用法の“V 过”は、完了アスペクト助詞の“V 了”と共起すると「強調」の意味を表すとされてきたことに関して、「予定を遂行すれば十分満足できる状態に至る」という含意が生じるため、そのような意図が汲み取れることを明らかにした。加えて、これまでにあまり指摘されなかった現象として、予定遂行用法の“V 过”と複数を表す表現（全称量化表現、該当事物の列挙表現、量的な観点からの連用修飾表現）との共起性についても指摘し、これらの複数表現はいずれも質的、量的に十分な程度で行為を遂行することを表すものであるため、先述の「十分満足できる状態に至る」という含意とも意味的に合致することを指摘した。

第3章では、第1章及び第2章で考察した“V 过”の経験用法と予定遂行用法に関して、出来事の帰属領域という概念を導入しつつ、両者の関連性を考察した。定延 2006 は、出来事の帰属先として「場」と「世界」という二つの領域があることを指摘しているが、本稿ではこの概念を“V 过”の用法にも援用できることを確認した。具体的には、経験用法の“V 过”は、話し手が過去から現在までの全期間を対象とした広い時間領域を想定し、その領域における出来事存在を述べるものであることを明らかにした。一方、予定遂行用法の“V 过”は、話し手が現在に近い狭い時間領域を想定し、その領域における出来事存在を述べるものであることを明らかにした。それゆえ、取り立てて大きくも小さくもないような中途半端な時間領域を想定して“V 过”を用いる場合には、経験用法と予定遂行用法のどちらも解釈できるような中間的な表現になってしまうことも併せて指摘し、経験用法の“V 过”と予定遂行用法“V 过”は連続体を成しており、グラデーションがあるという点も確認した。また、従来はそれほど詳しく考察されることがなかった“V 过”と共起する各種の副詞の機能に関して考察を行い、それらの副詞は話し手がどのような時間領域を設定しているかという意識を反映するものであることも指摘した。

第4章では、第1章で確認した「中国語における経験とは何か」という点を踏まえ、中国語において出来事が経験と認識されるための条件（現在との時間的隔たり、出来事の情報価値）が他の言語、とりわけ日本語においても同じであるかどうかという観点から、日本語で経験を表す「V たことがある」という表現との比較対照を行った。その結果、現在との時間的隔たりに関しては、日本語にも同じ条件が存在するが、その時間的隔たりは中国語のそれ

よりも長いもの（現在からより遠い過去）であることが明らかになった。個々人の語感によっても揺れがあるだろうが、日本語ではおおよそ 3 年程度以上前の出来事であって初めて経験として捉えやすくなることを指摘した。また、出来事に情報価値が必要である点に関しては、日本語と中国語で共通することも明らかになった。加えて、日本語には中国語にはない、出来事の不特定性という条件があり、唯一的に限定できる特定の出来事は日本語では経験として捉えにくく、「V たことがある」を使用しにくいことも指摘した。そして、「V たことがある」が特定の出来事に対して使用しにくいことに関して、それが限量的存在文（不特定の事物の有無多少を述べるタイプの存在文）であることにその要因を求めた。また、不特定の出来事とはいわば「類」であり、客観的な時間軸上に置かれる事態とは異なる、時間を超越したものであるが、この点は益岡 2013 の言う属性叙述へとつながるものであり、「V たことがある」が属性付与の機能を担うことも併せて指摘した。加えて、「V たことがある」と「V ている」の経験用法の差異についても考察した。「V ている」の経験用法は、過去時を表す時点表現などで当該の出来事が過去のものであることを保証して初めて出てくる用法であり、その出来事の効力が現存しているという意味を表すために結果的に経験の意味が出てくるのであって、基本的には特定の出来事を叙述するという点において「V たことがある」とはその意味機能が異なるということを示した。

第 5 章では、第 4 章の考察結果を踏まえ、経験用法の“V 过”と「V たことがある」が持つ性質が、連体修飾節においても維持されることを明らかにした。具体的には、連体修飾節内の出来事が時間詞や文脈から特定のものであると認識できる場合、経験用法の“V 过”は使用できるが、「V たことがある」は使用しにくくなることを述べた。逆に、出来事の特定性が認識されない場合には、「V たことがある」も連体修飾節で使用することができ、その典型例としてアンケートなどの文脈が相応しいことを指摘した。また、予定遂行用法の“V 过”に関しても連体修飾節に現れ得ることを指摘し、そこでも主節同様、「必要なことを済ませる」という意味が出てくることを明らかにした。

以上の考察を踏まえて、終章では動詞接尾辞“V 过”の位置付けに関して再考を行った。“V 过”は従来、完了の“V 了”や持続の“V 着”と同じく、アスペクト助詞と扱われており、実際、動作やそれに伴う結果状態が済んでいる（過ぎ去っている）ことを表すことができる以上、アスペクト的な意味を表す機能があることは否定できないと考える。しかしながら、第 1 章および第 2 章で考察したように、“V 过”は「現在から比較的遠く、かつ情報価値のある珍しい出来事であること」といった条件や、「現在から比較的近く、かつ行う必要がある行為／発生が想定される事態であること」といった条件を求めたりする。これらの条件は、完了の“V 了”や持続の“V 着”では見られないものであり、“V 过”の特異性を物語っている。また、純粹にアスペクトを表す助詞は、否定副詞の“没（有）”とは共起できず、連体修飾節にも現れにくい。第 1 章及び第 4 章で確認したように、経験用法の“V 过”は否定副詞の“没（有）”と共起でき、連体修飾節でも使用可能である。また、予定遂行用法の“V 过”は、否定副詞の“没（有）”とは共起できず、この点はアスペクト助詞と類似しているが、第 2 章及び第 5 章

で確認したように、連体修飾節に使用できたり、完了アスペクト助詞の“V了”とも共起できる。しかも、“V过”は単に出来事の時間的的局面を叙述するという機能を超え、情報価値のある出来事への遭遇を経験と捉えて人や事物に属性を付与したり、予定された出来事を済ませたことで十分満足できる状態に至ることを示したりと、他者に様々な働きかけを行うインタラクティブな機能を持っている。そして、このインタラクティブな性質が、純粹に出来事の時間的的局面を述べるアスペクト助詞とは異なる点であると考えられる。“V过”のこれらの意味的、統語的、機能的な特徴を踏まえ、本稿では“V过”を、アスペクト的な意味を担いつつも、インタラクション性の高い複合的な機能を持つ動詞接尾辞として、純粹なアスペクト助詞からは外すことが妥当であると結論づけた。